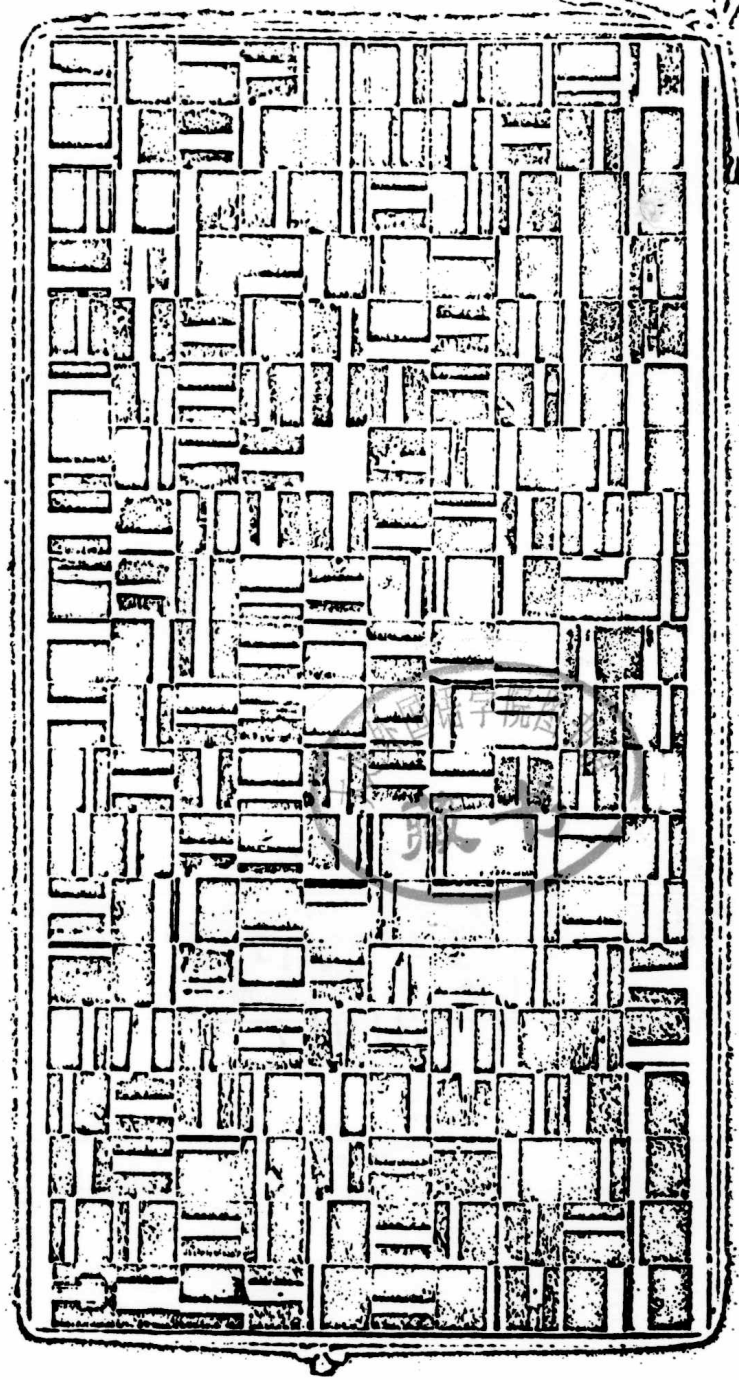
鮎川信夫著作集　第十巻
研究

発行一九七六年十一月十五日　著者鮎川信夫　装幀粟津潔　発行者小田久郎　発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三―十五　電話東京二六七―八一四一　振替東京八一二一　印刷秀峰美術
製本美成社　製函岡本紙器　用紙北越製紙　表紙クロスダイニック
© 1976, Nobuo Ayukawa

161157
日文 701698653



鮎川信夫著作集 10

思潮社

文部省
埼玉県立川越図書館
31917
蔵書

目次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

I

吉本隆明　鮎川信夫論　12
鮎川信夫論――交渉史について　21
大岡信　戦後詩人論――鮎川信夫ノート　30
「俗」ということ　39
現代社会のなかの詩人――『鮎川信夫詩論集』　44
堀川正美　詩人の出発――鮎川信夫の『戦中手記』について　47
謎めいた熱情者　62
長田弘　困難な時代の詩人　64
北川透　荒地の蘇生――鮎川信夫著『戦中手記』について　93
詩論とは何か――詩人の戦争責任論があらわにしたもの　99
魂刻む衝撃の一編――鮎川信夫の『Solozenitsyn』　102
月村敏行　戦後詩論と「現代」　105
鮎川信夫の切りひらいたもの　115
桶谷秀昭　鮎川信夫論　125
『厭世』について　135

II

田村隆一　地図のない旅――『鮎川信夫詩集』について　140
思想の血肉化――鮎川信夫『戦中手記』に思う　142
三好豊一郎　『橋上の人』解説　144
鮎川信夫粗描　146
黒田三郎　「荒地」論　153
『鮎川信夫詩論集』ではじめてよんだふたつの論文　156
北村太郎　『鮎川信夫詩集1945～1955』解説　161
*
杉本春生　新「転向論争」について　165
中村稔　現代詩のエッセイスト　173
原崎孝　告発者の栄光と悲惨――鮎川詩論の問題点　176
菅谷規矩雄　手帖時評　180
岩田宏　『鮎川信夫詩論集』――芸術家の持続　189
谷川雁　暖色の悲劇――『鮎川信夫全詩集1945～1965』　193

橋川文三　未来への遺書――『戦中手記』をめぐって　195
菅谷規矩雄　『鮎川信夫全詩集』　198
渡辺武信　詩はほろびたか　201
いいだ・もも　鮎川信夫論　209
松原新一　「荒地」論――歩行の倫理　217
入沢康夫　試みる精神の存在証明――問題を提起した鮎川信夫　222
岡田隆彦　戦後詩におけるイメジの二律背反――眼の欲は何処へ　223
渡辺広士　荒地の中の時間と詩　225
芹沢俊介　無名者の倫理　230
高良留美子　鮎川信夫の詩論――鮎川・吉本の戦争責任論をめぐって　241
饗庭孝男　鮎川信夫の倫理性　252

Ⅲ

北村太郎　『死んだ男』　262
村野四郎　『現代詩とは何か』解説　263
木下常太郎　吉野弘　『橋上の人』　263
長谷川龍生　『橋上の人』　264

関口篤　『橋上の人』　265
飯島耕一　『鮎川信夫詩論集』　266
篠田一士　『鮎川信夫詩論集』　267
関根弘　『戦中手記』　268
いいだ・もも　『一人のオフィス』　269
関根弘　夢のない夜　271
高野喜久雄　『歴史におけるイロニー』『鮎川信夫詩人論集』　272
飯島耕一　『鮎川信夫著作集』　274
中桐雅夫　『鮎川信夫著作集』　275

*

谷川俊太郎　鮎川信夫に33の質問　277
原崎孝　年譜・参考文献・書誌　286

補遺

現代詩についての二十三章　310
アプダイクについて　333
T・S・エリオット『詩の効用と批評の効用』　339

死と生の論理　347
キリスト教とマルキシズム　355

あとがき・解説集　その他

『現代詩作法』第一版あとがき　360
『現代詩作法』第二版あとがき　361
『現代詩作法』改訂版あとがき　362
『鮎川信夫詩論集』あとがき　363
『詩の見方』あとがき　364
『抒情詩のためのノート』あとがき　367
『日本の抒情詩』あとがき　367
『一人のオフィス』あとがき　368
『歴史におけるイロニー』あとがき　371
『鮎川信夫詩人論集』あとがき　373
『自我の発見』編者あとがき　375

クルト・ジンガー『わが最大の事件』訳者あとがき　375
バーバラ・ウォード『世界を変える五つの思想』訳者あとがき　377
ウォルター・ロード『決死の時』訳者あとがき　380
ケネス・オルソップ『悪名高き男たち』訳者解説　382
フルトン・アワズラー『偉大な生涯の物語』訳者解説　385
ウイリアム・バロウズ『ジャンキー』訳者あとがき　387
先行きに対する期待　390
感想　391
*
編集ノート＝三好豊一郎　392
掲載誌紙一覧　396

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

I

吉本隆明

鮎川信夫論

鮎川信夫論——交渉史について

鮎川信夫の、戦後の秀作「アメリカ」は、つぎのような一節からはじまっている。

それは一九四二年の秋であった
「御機嫌よう！
僕らはもう会うこともないだろう
生きているにしても倒れているにしても
僕らの行手は暗いのだ」
そして銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら
ひとりずつ夜の街から消えていった

一九四二年（昭和十七年）は、二月に日本軍がシンガポールを占領した年であり、六月には、ミッドウェー沖で最初の決定的な敗北をきっした年である。

そのころの、内省的な青年たちは、典型的につぎのようにかんがえていた。

たとえ、この戦争が勝利でおわっても、敗北でおわっても、自我の運命はくらく、のたれ死にしてしまうだろうと。

勝利となれば、日本ファシズムの思想的なあらしの下で、あのばかばかしい説教と統制にくるしめられて生きねばならないことは、わかりきっていた。敗北すれば、荒廃のなかで、破壊されて死ぬよりほかないとおもわれた。青年たちは、戦争権力に反抗することによって、自我を現実のほうへおしひらき、深化することができるかもしれないということを、まったく洞察することができなかった。

「銃を担ったおたがいの姿を嘲けりながら」

という鮎川の詩句は、くらい、ぬけみちのない、当時の知的な青年たちの心情を、たしかな眼でうつしとっている。そして、こういう世代的な体験を無視しては、鮎川を論ずることはできないらしいのである。

注意ぶかい読者ならば、鮎川の「アメリカ」ぼう頭の訣れの挨拶が、つぎのような、トオマス・マンの「魔の山」の一節に照応していることをしっている。

「御機嫌よう！——生きているにしても倒れているにしても、お前の行手は暗い。お前が巻き込まれた血腥い乱舞はまだ何年も続くだろうが、私たちはお前が無事で帰ることは覚束な

いのではないかと思っている。」

ここから、鮎川の個人的な体験にまで、ふみ込まねばならないのだが、そのまえに、ぼくたちの「血腥い乱舞」は、一九四五年に、日本の敗北でおわったことだけは、いっておかねばならぬ。勝っていたら、日本ファシズムの主動的なイデオローグになっていたにちがいない転向者は、コミュニスムへと再転向する。ほんとうのファシストは、かすりきずも負わず、社会民主主義者として再生する。ローマン的なナショナリストは、口をぬぐって抒情詩人にうまれかわる。モダニストは、また愚にもつかない超現実を構成しはじめる。

敗戦後の、こういうみじめな喜劇のなかで、死にそこなって戦場からかえってきた鮎川は、「眼をうしろにつけて前へ歩いてゆく」ことを主張せねばならなかった。

鮎川のうしろにつけられた眼は、一九四二年秋、戦場へたつとき、詩人森川義信がのこした訣れの挨拶――マンの『魔の山』の一節まで、たちかえってゆく。「暗い構図」で、鮎川は、こういう事情についてつぎのようにかいている。

「一九三九年の「荒地」に発表された森川義信の「勾配」は、我々の暗い青春の最も記念的作品であると共に、今なお我我の脳裏になまなましく刻み込まれ、我々と共に生きている。彼は戦争の血と硝煙の匂いのなかで死んだが、「勾配」は現在に至るまで我々と共に成長することをやめない。そして私は彼が戦地へ赴く時に簡単な走書きで、長い手紙は書けないからトオマス・マンの『魔の山』の最後の頁を自分の手紙だと思ってもう一度読み返してくれ、と言ってきたことを忘れ得ない。」

鮎川は、この忘れ得ない思い出と、じぶんの戦争体験とを、荒廃し、混乱した戦後の現実のまえで照しだしてみて、それをじぶんの資質とからみあわせて、つよく論理化し、いわば思想的なよりどころをかためる必要があった。わたしの推定では、「死と生の論理」というトオマス・マン論は、ほぼ、そういう企意でかかれている。

鮎川にとって、戦前の、破局をひかえた日本資本主義の最盛期に、自我形成のときをむかえた、ということはたいせつなことであった。戦前の「新領土」「荒地」「Le Bal」その他に発表された詩をみると、下降期特有の、没落的な感性と、まるでそれとうらはらな奇妙な明るさ、行手のわからないままの安定感、幸福感、孤独感、とがいりまじった鮎川の内部世界のすがたが、当時のモダニスムの影響下にあった青年に独特な受感の仕方で、はっきりとあらわれているが、鮎川はいわばこの「活字の置き換えや神さまごっこ」に熱中した青春の黄金時代、日本資本主義の黄金時代に、戦後的な逆光線をあてることによって、出発する。

『ブッテンブロオク』から『魔の山』にいたるマンの、ブルジョワ社会にたいする愛着と嫌悪、そこからマンの文学のライト・モチーフになっている死への近親感、を論じながら、鮎川が、感じているのは、じぶんの自我形成期にたいする郷愁のようなものである。

マンの背後に「滅びゆくブルジョア社会があり、古い芸術家の貴族主義を置き去りにして、新しい近代勤労人民階級が興りつつあり、革命の血の叫びを挙げている。」とかくとき、ほん

とうは、鮎川はじぶんが傾いてゆく戦前の黄金時代の思い出と、戦後の日本の革命運動にたいして愛着と嫌悪にはさまれて立ちどまっている現在とを、ひきくらべようとしている。このとき、鮎川の内部には、あまりにつよく戦前に執着しすぎ、戦後の革命運動に単純に同調してゆけない自分にたいする焦躁があって、そこからマンにおける「死への近親感」へ通ずるみちをみつけだそうとした。

「橋上の人」にでてくるのだが、鮎川が森川義信の思い出にたすけられて、マンを論じたころは、「妻も子もなく、この広い都会の片隅で、固いパンを嚙じって」生きていたし、「わたしは貧しい、わたしは病んでいる、貴方（父）がわたしに下さったものはこれだけですか」といわずにおられない精神状態にあった。

このような地点から「生きてゆくことが死に外ならぬというような状態、生を問ふことが、どうしても死に帰着してゆく悩める意識はどこでも問題にならぬであろうか。」というようにマンを擁護するとき、鮎川の内部には、戦前の自我形成期の思い出、戦争体験、戦後の荒廃した苦しい生活、をつらぬいてながれこんでくるある辛いかんがえがあったに相違ない。

それゆえ、

埋葬の日は、言葉もなく
立会う者もなかった、
憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった、
空にむかって眼をあげ
君はただ重たい靴の中に足をつっ込んで静かに横たわったのだ。
「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」

（「死んだ男」）

予感はあらしをおびていた
あらしは冷気をふくんでいた
冷気は死の滴り……
死の滴りは生命の小さな灯をひとつずつ消してゆく

（「アメリカ」）

誰も見ていない、
溺死人の行列が手足を藻でしばられて、
ぼんやり眼を水面にむけてとおるのを——

（「橋上の人Ⅳ」）

生と死の影が重なり
生ける死者たちが空中を歩きまわる夜がきた。
あなたの内にも、
あなたの外にも灯がともる。
生と死の予感におののく魂のように、
そのひとつひとつが瞬いて
死人の侵入を防ぐのだ。

（「橋上の人Ⅷ」）

このような、現実的な関心のつよい鮎川の作品をくまどっている死の観念は、いわば、戦前の自我形成期における日本資本主義文化の運命をひきずった死であり、僕らの行手は暗いという意識のままに生死もわからぬ戦場にたたねばならなかった戦争体験をふまえた死であり、また「戦争の犠牲、政治的背信、失業問題そしてその一切の暗澹たる社会環境」（幻滅について）を受感し、それを無意味な時代がしずかに腐敗してゆくとかんがえずにはおられなかった戦後の、現実をふまえた死であった。

この時期の鮎川の代表作であり、戦後日本現代詩の屈指の秀作である「繋船ホテルの朝の歌」は、一九四九年十月の「詩学」に発表されたが、これは、鮎川の内部にぬきがたくただよっている死への傾斜が、具体的な事件にぶつかったときしめした鋭い反応であるといえる。それは、荒廃した現実、希望のない未来、とじこめられた敗戦日本のいきぐるしさ、こういう一切から逃れたくて、死につかれた女と、どこか遠い世界へゆきたいと憧れながら、けっきょくは安ホテルで一夜をあかし、女とむかいあって白けきった朝食をとる、そういう個人的な体験をとおして、戦後日本革命の敗北してゆく現実へ、内部世界をおしひらいてみせた記念碑的な作品である。

ああ　おれは雨と街路と夜がほしい
夜にならなければ
この倦怠の街の全景を
うまく抱擁することができないのだ
西と東の二つの大戦のあいだで生れて
恋にも革命にも失敗し
急転直下堕落していったあの
イデオロジストの顰め面を窓からつきだしてみる
街は死んでいる
さわやかな朝の風が
頸輪ずれしたおれの咽喉につめたい剃刀をあてる
おれには堀割のそばに立っている人影が
胸をえぐられ
永遠に吠えることのない狼に見えてくる

たれもこのように、戦後現実を内面化したものは当時いなかった。

戦後革命は、一九四七年二月の二・一ゼネストの弾圧、敗北と、つづいて高揚した学生の反帝、反戦闘争が、日本共産党の分裂によって崩壊したとき、敗北にむかったが、平和革命論者とその下僕である民主主義詩人のたれひとり、それを洞察し、受感するものなく、鮎川によって、こういう作品がつくられつつあったことは注目に価する。

その前後から、鮎川は、「詩人の条件」「幻滅について」「祖国なき精神」などの評論で、ひろい意味での転向者的な立場をうち出し、日本コミュニスムとの対決へとすすみでたが、結果的にみれば、解放の幻影――平和革命論の図式のうえにたった擬似コミュニスムにたいするむなしい反撥におわっているのは当然であった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com